



「学校の献血セミナーで学んだこと」

柳井学園高等学校 3年 鈴木 洸晴すずき こうせい

「献血とは何か、正しく言うことができるか」と問われた時、多くの人は「血を必要として苦しんでいる人に、自分の血を分けてあげること」など、これに似たようなことを答えるのではないのでしょうか。けれども、これは「献血」という言葉の意味だけであって、献血がなぜ必要なのか、どのような患者さんが利用するのかなど、本当の意味で理解している人は少ないように感じます。僕も少し前までは、全く知りませんでした。

先日、学校で「献血セミナー」があり、その後で「卒業献血」として、初めて献血に参加をしました。それは、セミナーで、輸血に使用する血液は最新の医療をもってしても、今はまだ人工的に造ることができなくて、長期保存も難しいことや、輸血のほとんどが悪性新生物（ガン）や循環器系の患者に届けられることを知ったからです。そのため、何も知らなかった恥ずかしさもあり、僕も何か力になれば、と思い献血に申し込みました。血を400mLもとるのだから痛いだろうな、と思っていましたが、痛みは全くなく、10分という短時間であっさりと終わりました。そして、僕の心は、自分が社会に貢献することができた喜びと達成感、清々しさでいっぱいになりました。実際、献血が終わって教室に帰った時、献血を受けた人はみんな清々しい顔つきをしているように感じました。ほんの少しの勇気でできることなのだ、改めて実感することができました。

しかし、課題も山積みです。特に、国内では、少子高齢化により輸血を必要とする高齢者層が増加し、若い世代が減少しています。この10年間で、10～30代の献血に協力する人は31%も減少しているというデータもあり、今後益々少子高齢化が進んでいくと、血液の安定供給にも支障をきたす恐れがあるということが気になります。また、同じ血液型同士でないと、体が反発を起こしてしまい、献血ができないということです。こういったことを解決するためには、誰か知らない人を助けると言うのではなく、輸血を必要としている人が自分にとって親しい人・大切な人なのだという気持ちをもって、若い世代が中心となって献血への理解と協力を促しながら、継続して取り組んでいくべきだと思います。だから、僕はきっかけがお菓子目当てでも、記念品目当てでも何でもいから、仲間同士で誘い合って、その輪を広げていき、献血の根をどんどんと張り巡らせていけば、課題は少しずつでも改善されていくのではないかと考えています。そして、こうやって取り組んでいくことで、一人でも多くの命を守ることができると、僕は嬉しいです。



「献血推進作文」

柳井学園高等学校 1年 おかざき 岡崎 そうた 颯太

僕は、先天性の病気をもって生まれました。まだ小さい頃の話なので、ほとんど覚えていませんが、両親に話を聞くと、生後一か月で感染症による重症肺炎を発症し、先天性の病気の影響もあり、重篤な呼吸不全になったそうです。その際に、献血で集められた血液から作られた免疫グロブリン製剤という薬剤を使用し、長い入院生活になりましたが、回復することができたそうです。また、開腹手術の後にも、一時的に血小板輸血をしました。僕は、献血に貢献してくれた方々によって、命を救われたのだと思います。このように、献血により集められた血液で、救える命はたくさんあります。だから、僕はいろんな人に献血の大切さを知ってもらいたいと思っています。

僕は、以前親に「献血をしてみたい」と言ったことがありましたが、親はその時残念そうな顔をして「あなたは献血をすることは出来ないと思うよ。献血をするには、いろいろな条件が整わないといけないからね。」と言いました。そう、献血はやってみたい、という思いだけではできなかったのです。特定の病気にかかっている人、体重制限や年齢制限、献血日の体調不良、薬を服用している人などは献血ができず、基本的に健康で条件が満たされた人だけができます。僕は、体重の基準に足りなかったことと、過去の輸血や血液製剤の使用により、条件からはずれました。僕は残念ながら献血をすることが出来ませんが、献血が一人でも多くの命を救う大事な活動であることを、自分の身をもって理解しています。中には、自分がやらなくても他の人が献血するだろう、という考え方の人もいるかも知れませんが、今後そのような考え方をする方が増えていくと血液は不足し、自分がけがや輸血を必要とする病気をしてしまった時に、すぐに輸血できる状態にならないことが増えてしまい、救える命が救えるはずだった命になってしまう可能性も十分にあります。その可能性を少しでも減らすためにも、自身の経験や知り得た知識を広め、献血は本当に大切な活動だということを、皆さんに知ってもらえたらと思います。

世間でも若者の献血離れが進んでいるようなので、今回その第一歩として、自分の病気の経験から思ったことを中心に、活動を応援している者としてこの作文を書きましたが、他にも知識を深めるための勉強会などがあるのであれば、積極的に参加してみたいと思いました。



「気軽な献血」

宇部市立常盤中学校 2年 きむら ゆいと 木村 唯人

ある日、父が仕事帰りに、立派な四角い箱を持ち、ご機嫌な様子で帰ってきた。私がすかさず「その箱は何なの。」と聞くと、「献血の記念品のおちよこが届いたんだよ。」と父は言った。前々から父が献血に行っていたことを知っていた私は、また疑問を持ち、「じゃあ、そのおちよこが欲しくて献血に行っていたの。」と聞くと、父は「それもあるけど、毎回血液検査をするから健康状態が分かるのもあるよ。」と答えた。正直、私は少し驚いた。というのも、私が小学校低学年くらいのときから、学校やテレビの広告などで、「献血で救える命がある。」ということや、「献血でつなぐ命。」など、社会貢献の意味が強いものとして教わってきた。なので、献血する人皆が、そういった意識を持っているのかと思っていた。しかし、父が献血する理由が、私が想像していた「人助け」という理由より軽いものだったのでびっくりした。

そして、私は、他にも父のような軽い理由で献血に行く人がいるのか、インターネットで調べた。そしたら、「献血で社会貢献をしよう！」という記事が出てきた。読むと、父と全く同じ理由の人や、「趣味のようなものだから。」という人、他の記事では、「献血ルームではお菓子が食べ放題だから。」という人、さらには、「献血ルームで漫画が読めるから。」という人など、人助けとは程遠い理由の人が多くびっくりした。でも、その二つの記事どちらにも書かれていたことがあった。

それは、「このくらいの気軽な理由でも、結果的には人のためになっていますよ。なので、気軽に献血に行ってもはどうですか。」という意味の文であった。この文を読んだとき、私の献血に対する意識、考え方が変わった。今までは、前にも書いたように社会貢献の意味が強いものというイメージが大きく、少し極端であるが、献血に行くときは、そういう社会貢献、人助けの意識を持たないといけないとなんとなく思っていた。しかし今は、前述の二つの記事を読んだり、父が献血へ行く理由を聞いたりして、献血に行く理由は自分のためでも全然良いという考え方に変わった。父も、記事で取材されていた人達も、皆何かしら、献血へ行くメリットを見つけ、献血に通いつけている。そして、結果として社会貢献、人助けになっている。たとえ、理由が血液診断のためでも、漫画やお菓子のためでも。

話は変わるが、私がこの献血への視点を特に知ってほしいと思うのは、十から三十代の若者である。日本赤十字社によると、少子化もあると思うが、ここ十年間で十代から三十代の人々の献血協力者の数が約30%減少しているという。自分も含め、まだ献血に行っていない人は、一度人のためとかは置いて、自分なりの献血へ行くメリットを見つけ、一度気軽に行ってみてはどうだろうか。



「献血ボランティア」

柳井学園高等学校 3年 はしもと 橋本 ひびき 響

私はこの夏、地域のショッピングセンターで、献血の呼びかけボランティアに参加しました。そして、献血を呼びかけながら、ティッシュ配りをされていて、気づいたことがありました。

まず、行き交う人にティッシュを差し出すと、「私、もう年齢超えているのよ。ごめんね。」という声や、「若い時には沢山献血したんだけどね。」という声が多かったことに気がつきました。血液の成分によって違いはありますが、献血には、最高で69歳までという年齢制限があります。ティッシュ配り中にこのような声が多く、少子高齢化問題が地域にも差し迫っているのではないかと感じました。実際、献血量が足りていないことは問題として挙がっているようで、山口県では十代、二十代、三十代の献血者数が減っているそうです。このままだと今後、輸血を必要とする人に血液が届かなくなることも考えられます。

ボランティア中に、次第に私も献血をやってみたいと思い、ティッシュ配り後に、初めて献血をしました。献血をするまでに、健康チェックや血液検査など、様々な項目がありました。しかし、実際にかかった時間は、全部で三十分ほどで、痛みも針を刺すときに少しあっただけでした。看護師さんも優しくかったので、思ったより早く感じました。買い物中の若いカップルや、家族連れの方も献血をされていました。献血をした後は、私の血液は誰の役に立つのだろうか、とうれしい気持ちになりました。

血液は、当たり前私たちの体を流れていますが、今の科学技術では、人工的に造り出すことができません。「人間を救うのは、人間だ。」という献血のキャッチコピーを見て、はっとさせられました。事故や災害、血液疾患などの病を抱える患者さんは、今も私たちの血液を必要としています。気軽にでき、さらには誰かの命も救うことができる、献血という温かな社会貢献を私たち若者が中心になり活発に参加していかなければならないと思います。そして、私も参加者の一人として、二回目の献血の案内が来たら、必ず足を運ぼうと思っています。



「今、生きていられるのは」

山口大学教育学部附属光中学校 1年 藤本^{ふじもと}阿子^{あこ}

「母は輸血に命を救われた。」

そう教えられたのは、まだ小学生にもなっていないころのことでした。このころは、母の話の内容が理解できず、あまり記憶に残りませんでした。もう一度、母の話をしっかり聞いてみようと思ったのは、献血推進作文を書こうと、決めてからでした。

母が輸血に頼ることになった理由は、私達を無事に出産するためでした。ちなみに、私が、「私達」と作文に書いたことにも、理由があります。私には、双子の妹がいます。このことが、母の出産にも大きくかかわることだからです。母は、私達を自然に産む「自然分娩」という方法の出産を望んでいました。

ところが、三十六週目辺りを過ぎると、急に母の体調が悪くなりました。血圧がどんどん上昇する、体がむくむ、肝臓の機能が低下するなどさまざまな症状が出ました。だから、急きょ「帝王切開」という方法で、私達を産むことになりました。帝王切開とは、母親のお腹を切り開いて赤ちゃんを取り出す、出産の方法です。この方法は、母親のリスクも伴います。出血多量で母親の体が持ち堪えず、死んでしまう、というケースも考えられるということです。

手術予定日、母はやはり、緊張していました。手術をする前に、腰から下の感覚をなくす、腰椎麻酔を打つのですが、大きなお腹が邪魔をして、うまく丸まることができず、麻酔がうまく打てなかったそうです。だから、母には私達を取り上げる感覚が伝わってきて、少し痛いと感じたそうです。そう考えている内に、母の意識はだんだんもうろうとしてきました。赤ちゃんが二人分入っていた母のお腹には、ものすごく大きな負担がかかっていたのでしょう。母のお腹から出た血は、うまく止血ができず、二リットル近くの出血をしてしまいました。大人の体には約四～五リットルの血液があり、一リットル以上の血液を失うと、命に危険が及ぶそうです。このまま出血をし続けると、母の体は持ちません。そのような時、命の手を差し伸べてくれたのが、輸血でした。母の止血をしながら、輸血をしていたので、何とか母の命は助かりました。普通、大量の輸血をした人は、たくさん人の血が混じっているのです、副作用が出るそうですが、母はあまり副作用が出なかったそうです。それは、四百ミリリットル献血をして下さった方が多く、小人数の血しか混ざらなかったからだ、私は考えました。

献血をして下さった方々は、母の命の恩人です。献血がなければ、私は母の顔を見ることすら、できなかったでしょう。母も、

「私の命を助けてもらった献血には、とても感謝している。」

と、言っていました。この話を聞き、私は、「私の知らない『誰か』に手を差し伸べたい。」と思いました。みなさんも、「誰か」のために献血をしてみませんか。



「助け合いの輪」

宇部市立常盤中学校 3年 藤本 乃愛^{ふじもと のあ}

献血というと、商業施設に買い物に行ったときに献血車で献血の協力を募っているのを見かける程度の認識しかなかった。以前、何度か母が献血しているのにくっついてみたことがあったが、針が痛そうだなと思ったくらいしか印象がなかった。

今回、献血について作文を書くにあたって献血について自分なりに考えてみた。そうするとたくさんの疑問が湧いてきた。わざわざ時間をかけて自分には何の得にもならない、ましてや何回も太い針を刺されて痛い思いまでして献血をするのは、そのひとにとって何の意味があるのか疑問に思った。そこで献血について調べてみた。献血には全血献血と成分献血の2つの種類がある。全血献血では、血液中のすべての血液を献血する方法で、短時間で終わる。一方で成分献血は、血小板や血漿といった特定の成分だけを採取し、体内で回復に時間のかかる赤血球は再び体内に戻す方法がある。成分献血は、体に負担が少ない短いサイクルで次の献血ができるようになるが、一度体内から血液を採り、必要な成分を取って、また体内に戻すためかなりの時間が必要となるということが分かった。うちの母のように献血をやる人は機会を見つけてはたびたび献血をしている。反対にしない人は一生することはないし、献血を強要されることはない。この違いは何なのだろうと思って母に聞いてみた。すると母は、健康な限り血液は作られるのだから、必要としている人がいるなら分けてもいいじゃない。自分だって必要な時が来るかもしれないし、助けてもらうかもしれない、自分の損得ではなく、自分に出来ることをしているだけだと。その言葉を聞いて驚いた。同時に反省した。これまで自分は誰かのために何かをしようと思ったことなんてなかった。ましてや知らない誰かのために自分の時間を費やして何かをしようなんて思ったことはなかった。

献血とは、たくさんの人の善意の思いやりで成り立っていることに気が付いた。血液を必要とする知らない誰かのためにそれぞれができることをするなんてとてもすごいことだと思った。このシステムが成り立っていることこそ、優しい社会だと感じた。たくさんの人が誰かを思いやる事が出来れば、戦争なんてありえなくなるのにと考えた。

献血は十六歳から可能になる。私はまだ十四歳でまだ出来ないけど、できる年齢になったらぜひやってみたいと思う。自分の血液が必要としている人の命をつなぐお手伝いができるならば少し誇らしくも思える。たくさんの人がそんな気持ちになってもらえたら、もっともっと優しい社会になると思う。